

Ⅲ ヒロシマの歌

修学旅行第1日目に訪れる広島市平和記念公園、平和公園や資料館での学習をより確かなものとしていくために、全クラスが『ヒロシマの歌』の学習に取り組んだ。資料と授業記録を紹介したい。

【資料】ヒロシマの歌

わたしはその時、水兵だったのです。

広島から三十キロばかりはなれた呉の山の中で、陸戦隊の訓練を受けていたのです。そしてアメリカの飛行機が原爆を落とした日の夜、七日の午前三時ごろ、広島町へ行っただけです。

町の空は、まだ燃え続けるけむりで、ぼうっと赤くけむっていました。ちろちろと火の燃えている道を通り、広島駅の裏にある東練兵場へ行きました。

ああ、その時のおそろしかったこと。広い練兵場の全体が、黒々と、死人と、動けない人のうめき声で、うずまっていたのです。

やがて東の空がうす明るくなって、夜が明けました。わたしたちは、地獄の真ん中に立っていました。本当に、足のふみ場もないほど人がいたのです。暗いうちは見えませんが、それがみなお化け。目も耳もないのっぺらぼう。ぼろぼろの兵隊服から、ばんばんにふくれた素足を出して死んでいる兵隊たち。べろりと皮をはがれて、首だけ起こして、きょとんとわたしたちをながめている軍馬。誰も話している者はありませんでした。ただ、うなっているか、わめいているばかりです。そして、まだまだ、町の方から、ぞろりぞろりと、同じような人たちが、練兵場に流れて来るのです。

練兵場の中ほどに、演習用に、長々とクリークがほってありました。そこには、赤くにごった水がたまっていました。

焼けただれた人々は、いつの間にかその水を求めてはい寄り、まるでげいし毒薬を飲んだように、水を口にすると、浅い水たまりに頭をつっこんで動かなくなっていくのです。

「水を飲みしちやいかんぞ。やけどしているやつに水を飲ませると死ぬんだから。」

軍医がわたしたちに注意をしました。だが、わたしたちが注意してみても、もう注意など聞ける人々ではありません。わたしたちは止めませんでした。水を飲まなく

ても、間もなく死んでいくのですから。

わたしたちは、練兵場の真ん中に、死体をよけて、テントを張り、救護所を作りました。

軍医が、ごろごろころがっている人々の目を、一人一人、まるで魚をより分けるように調べていきます。わたしたちは、その中で生きている人だけをテントに運ぶのです。

テントは、すぐいっぱいになりました。木かげや、しまいには何もないぎらぎら太陽の照りつける草原にも、赤十字の小さな旗を立てて、生きている人をただ集めるだけでした。

一日目は、死体を運んでいるうちにくれました。夜になると、まだ燃え残っている火で町の空は赤く、その赤い空の色が、クリークの水に映って、まるで血の川の色をしていました。ずると焼けただれた人のはだににじんだりンバ液も、不気味に光ってうごめいているのです。

わたしたちは、練兵場の外ずれにある林の中にテントを張って、交代にねることになりました。

その夜、ふとわたしは赤んぼうの声を聞きました。初めはゆめを見ているのだと思ったのです。でも、少しねむると、また赤んぼうの声で目を覚ますのです。とうとう、わたしは起き出して、懐中電燈で、声のする方を探し始めました。でも、見当たりませんでした。

そのうちに、交代の時間がきました。わたしたちは、テントを出て、それから四時間、くずれた建物や土にうずまった広島駅の復旧作業に行きました。そして、夜明けにテントに帰ってきました。その時、わたしは、自分たちのテントのすぐ後ろで、立ちすくみました。ここだったのです。

一人の赤ちゃんが、女の人にだかれていました。初め、わたしは女の人にはねむっているのだと思いました。赤ちゃんはお母さんの胸にうつぶせて、顔をくっつけていました。すると、その時、

「ミーちゃん、ミーちゃん。あんた、ミ子ちゃんよね。」と、とつぜん女の人が声を出して、赤ちゃんの顔を頭をなでるのです。よく見ると、お母さんは、目が見えないらしいのです。

このお母さんは、ミーちゃんと呼ぶこの赤ちゃんと、はなれた所にいる時に、あのおそろしいことが起こった

にちがいありません。目がよく見えないままに、おしつぶされた家の中から、それとも、だれか他の人に助け出されていたミーちゃんを探し出して、やっとここまで逃げてきたのでしょう。だが、よく赤ちゃんの顔が見えなくて、心配で、おそろしいです。

「ミーちゃん、ミーちゃん。」

と、呼ぶのをやめたかと思うと、お母さんは、こんこんとねむりこんでしまいました。と、赤んぼうが泣き始めました。と、また、お母さんが呼ぶ。お母さんは、だんだん気が遠くなっていくようでした。背中から後頭部にかけて、ずるりと皮が落ちているのです。

「しっかりするんだ、お母さん、しっかりしなきゃ……」

わたしは思わず、そんなことをさげびました。でも、お母さんは、わたしに答える様子はありません。しばらくすると、また、

「ミーちゃん、ミーちゃんよねえ。」

と、くり返すばかりです。わたしは、このままにして、立ち去れなくなりました。と、どうすればいいのか、さっぱり分かりません。「しっかり、しっかり……」ただそんなことばかり、心の中でさげんでいました。

軍医のいる所へ連れて行ったらいいものかどうか、そんなことに迷いながら、いったんテントに帰りました。すると、それまでより大きな赤ちゃんの泣き声がありました。しかも、いつまでたっても、泣き続けるのです。

行って見ると、お母さんは、もう死んでいました。赤ちゃんのくわえていたおっぱいが、固くなってしまったのです。お母さんは、赤ちゃんをしっかりだいたまま、動きませんでした。

わたしは、赤ちゃんをだき取りました。その時の、固くだきしめた冷たいお母さんの手の力、わたしは今もまざまざと思い出すことができます。わたしは何度も、お母さんから赤ちゃんをうばい取るような気がして、気がとがめ、考えこみました。その手は、生きてるとしか思えませんでした。

「だいじょうぶですよ。お母さんわたしが預かります。」

わたしは兵隊でしたし、預かりきれぬわけがありません。それでも、そうお母さんに言わないと、赤ちゃんをもちとることができませんでした。

わたしは赤ちゃんをだいて、駅の方へ走りました。とちゅうで、名前のことを思い出しました。引き返して、お母さんの胸から、ぬい付けてあった布の名前をちぎり

取りました。

しかし、どこへ行っても、赤ちゃんをわたせそうな人など歩いていません。みんな、傷ついた自分の体をどうすればいいのか迷っているのです。とても人のことなど頭にうかばないし、見えないといった様子です。

駅の近くまで行った時、やっとリヤカーに荷物を積んでにげて行く二人の人に会いました。

「もしもし、この赤ちゃんを乗せて行ってくれませんか。母親が死んでるんです。けがはなさそうですがね。この子には……」

わたしはそう言って、ポケットに昨夜の夜食のかんばんがあるのを思い出して、いっしょに出しました。

しばらく、二人ははっとしたように顔を見合せていましたが、

「ええでしょう、車に乗せてつかえ。駅に救護所あるでしょうから。ごちそうさんです。」

「ねがいます。」

わたしはそう言うのと、せつかく取に帰った名ふだをわたすのも忘れて、大急ぎで帰りました。とちゅうで名ふだのことをまた思い出しましたが、もう追いかけるひまはありませんでした。

わたしは大急ぎでテントに帰ったのですが、もう食事が始まっていました。わたしは、どこへ行っていたのかときかれて、兵長にしかられ、ひどくぶたれました。なぜか、わたしは赤ちゃんのことを話しませんでした。いくら説明しても、それは、兵隊のわたしが、かつてな行動をとっただけのことなのですから。戦争ということが、こんな悲しいものであることを、その時初めて知りました。

それから長い年月がたちました。

戦争が終わって、七年目のある日、わたしはラジオから聞こえてくる言葉に、はっとしました。それはたずね人の時間でした。

「……さんが、広島島の練兵場で、一つか二つの赤んぼうを、リヤカーを引いて行く家族の人に預けた海軍の兵士のかたを探しておられます。」

と言うのです。まさかと思いました。それに、初めのほうを聞きもらしているのも、たずねている人の住所も分かりません。

でもわたしは、もうすっかり忘れていたあの日のことを、急にまざまざと思い出しました。ミ子ちゃんと呼ば

れていた赤んぼうのお母さんの死に顔は、はっきりと目にうかびました。初め、なんだかあのお母さんが、探しているようなさっかくを起しました。だが、そんなことがあるはずがありません。もしかすると、あのリヤカーを引いて行った人だろうか。でもわたしは、あの時ミ子ちゃんをたのんだ人の顔は、どうしても思い出せませんでした。

それから三日間、ラジオのたずね人の時間を熱心に聞きました。くり返し放送するかもしれないと思ったからです。しかし、二度と聞くことができませんでした。

わたしはふと、あの時、お母さんの胸からもぎ取った名ふだを、あのころの手帳といっしょにだいにじに持ち続けていたことを思い出しました。長い時間かかって、それを探し出すと、わたしは放送局へ行って、たずねてきている人の住所を教えてくださいました。たずねている人の名前は女の名で、住所は島根県になっていました。

あるいは、全くわたしには関係のないことかもしれないとも思いましたが、とにかく、あの時の様子を書いて、もしやわたしのことではないでしょうかと手紙を出しました。すると、すぐに返事が来ました。それには意外なことが書いてありました。

———こんなに早く、あなた様からご返事をいただけるとはゆめにも考えていませんでした。はたして、あの時の兵隊さんが生きていらっしゃるかどうか、また、たとえお元気であっても、あの時のことなど、覚えていて、返事を下さるかどうか、それほどあてにもしていなかったぐらいです。でも、どうしても、あの時の、赤んぼうをだいてかけていらっしゃった兵隊さんのことを思うと、だまっていられなくて、放送局にお願いしたのでした。

あの時、わたしたちは、それほど気にもしないので、まるで荷物のように赤ちゃんを預かりましたが、駅に行っても、どこへ行って、赤んぼうは引き取ってもらえませんでした。わたしたちは、親類をたよって、甘日市まで行くところでした。その甘日市へ行って、だれも相手にしてくれる人はありませんでした。

そのうちに、

『この子はきっと、ヒロ子の生まれかわりよね。』

そんなことを考えるようになりました。と申しますのは、あの時、わたしたちは目の前で自分たちの赤んぼうをなくしたところだったので。それで、名前も同じヒ

ロ子にして、今まで育ててきました。

ところが、今年の二月、主人がとつぜん、血をはいて死んだのです。主人は広（地名）の工廠に勤めていて、あのピカドンの光にはぜんぜんあたっていないのです。工場から帰ってくると、家も何もかもなかったのです。それなのに、七年もたっているというのに、原爆症で白血病だったのです。

主人に急に死なれて、わたしたちはくらせなくなったのです。今、主人の里の、広島と島根の県境のこの村に来ているのですが、どうしてこの子を育てていったのか迷ったあげく、あの日のことを思い出し、もしや、この子の本当の身内のかたが見つからないのかと、たずね人に出したわけでございます……。

「ありがとうございます。ありがとうございます。ミ子ちゃんは元気で、助かったのですね。」

わたしは思わず独り言を言って、一人で手紙に頭を下げました。

それにしても、遠くにはなれているわたしは、どうしていいのかわかりませんでした。わたしはすぐにもとんでいって、ミ子ちゃんに会ってみたいと思いました。でも、わたしも勤め人です。そう、かつてに休むわけにもいきません。

わたしはすぐ返事を書きました。夏まで待ってください。夏になったら、きっと休みをもらって、広島へ行きます。広島でお会いして、いろいろわたしにできることなら相談いたしましょう。そういう返事を出しました。

その年の夏、ちょうどあの日のように朝からぎらぎらと暑い日、広島で、わたしたちは会いました。赤いズックぐつに、セラー型のワンピースを着ている一年生というのが、目印でした。わたしは、白いワイシャツにハンチング、こん色のズボンというのが目印の約束でした。すぐに分かりました。

「橋本さんですね。」

「はい。あの……」

「ぼく、稲毛です……」

ふしぎな気持ちでした。あと何を話していいのかわかりませんでした。広島はすっかり変わってしまいました。ミ子ちゃんは、はずかしそうに、何を言ってもだまって、お母さんのそでにかくれていました。

「ああ、この子は何も知らないのだな。幸せだな。」

わたしは最初にそう思いました。

その日、初めて、わたしはあの日死んでいったミ子ちゃんのお母さんの話をしました。とちゅうまでいっしょうけんめいに聞いていたお母さんは、急にぼろぼろとなみだを流しだして、

「ええ、もう、今日お会いするまでに、決心したのです。ヒロ子はやっぱりわたしの子です。だれがなんと言ったって、あげるものですか。」

ミ子ちゃんをだれかに預けたいという相談をするために来たはずのお母さんは、そう言って、泣きじゃくるのです。

「そのお母さんは、ほんとうにえらいお母さんですわ。わたしははずかしい。目の前で、死なせてしまったのですものね。そのかたに代って、わたしは、今度こそ、本当に、ヒロ子のお母さんになります。遠い所から来ていただいて、すみませんでした。でも、こうしてお話をうかがえたので、決心できたのです。」

わたしは、ミ子ちゃん——いいえ、ヒロ子ちゃんです。ヒロ子ちゃんのない所で話し合いました。ヒロ子ちゃんは、本当のお母さんだと思っているのですから。

ヒロ子ちゃんとお母さんは、その日の夕方の汽車で、また島根の方へ帰りました。わたしたちは、ヒロ子ちゃんが中学校を卒業した時に、また会う約束をしました。その時まで、何も、ヒロ子ちゃんには打ち明けないことにしました。

わたしは、ちょっとさびしい気がしました。半日しか会えなかったからむりもありませんが、ヒロ子ちゃんと、何もお話しができなかったからです。二人が汽車に乗ってから、プラットホームに売っていた、パイナップルの氷菓子を一袋買って、ヒロ子ちゃんにわたしました。その時、

「おーきに。」
と、言ったきりでした。

その時の、何かヒロ子ちゃんの暗いかげが、いつまでもわたしは気になりました。すると、追っかけるように手紙が来て、これはまた悲しいことが書いてありました。

今いる島根の家は、死んだ主人の家で、主人の母、ヒロ子ちゃんの義理のおばあさんにあたる人が、ヒロ子ちゃんが気に入らないのだというのです。死んだ本当の孫のことを思うにつけても、老人の意地の悪さで、何かとヒロ子ちゃんにあたるのだというのです。そして、とう

とうある日、

「おまえは拾われた子のくせに……」というようなことを、ヒロ子ちゃんに言っておこつたのだそうです。

「やはり、本当のことを、もう言ったほうがいいのでしょうか……」

お母さんの手紙には、こう書いてありました。

それはわたしにも分からないことでした。広島で初めて会った時の感じでは、はっきりしなくても、何かヒロ子ちゃんも感じていることがあるようにも思われました。ヒロ子ちゃんをよそにやりたいというお母さんの弱気が、ヒロ子ちゃんにも敏感に感じとられていたのにちがひありません。わたしは、できれば、いなかの家を出て、ヒロ子ちゃんと二人でくらすことができないものだろうかと思ひ、そのことを書き送りました。

すると、その年のくれ、ヒロ子ちゃんの親子は、広島に出て、小さな洋裁学校に住みこみで働けるようになったという手紙が来ました。わたしはほっとしました。それから二度三度手紙が来ました。その手紙もだんだん短くなって、しまいには来なくなりました。わたしもいつかヒロ子ちゃんのことを、忘れていくようでした。

ところが、今年の春、何年ぶりかで手紙が来ました。ヒロ子ちゃんが中学を卒業したのです。

そして、ぜひ一度会ってヒロ子のお母さんの話などしてやってほしいとありました。

そうして、今年の夏、わたしはまた広島を訪ねることになったのです。わたしは原爆の記念日を選びました。ヒロ子ちゃんはもう十五でした。中学を卒業して、お母さんが小使いさんをしているその洋裁学校で、洋裁の勉強をしているのでした。もうすっかりむすめさんのように大きくなっていました。

わたしは記念日を選んだことを、後悔していました。記念のいろいろな行事は、何かわたしたちの思い出とかけはなれたものにしかなかったからです。

その日、わたしはいよいよヒロ子ちゃんに、死んだお母さんのことを話す約束をして、二人で一日、町を歩き回ったのです。でも、どこにも、そして、いつまでたっても、そのきっかけができないままに、つかれてしまいました。

夕方、わたしたちは一けんの食堂に入りました。その食堂の裏は、川に面していました。暑いので、わたしたちはその川の見える窓の近くに席をとりました。

「ヒロ子ちゃん、もう洋服ぬえるのかい？」

「いいえ、今、ワイシャツやっているんです。」

そんな話を始めながら、ふとわたしは窓の外を見ました。なんだか、赤いものが、川の上から流れてくるのです。

「あっ、あれ。」

と、言うのと、

「とうろう流しです。去年もやっていました。きれいでずよ。」

ヒロ子ちゃんが教えてくれました。去年、わたしも、広島のととうろう流しにことを新聞で読んで知っていました。原爆犠牲者の戒名を書いたとうろうを、川に流しているのです。

わたしは、そうだ、今話さなければならぬのだと思いました。

わたしはやっと、ポケットに持っていた布の名ふだを取り出して、

「ヒロ子ちゃん、これ何だか知ってる？」

と、ききました。

広島市横川町二一三

長谷川清子 A型

と書いた、うすよごれた小さな名ふだです。

「何ですか、それ。」

ふしぎそうに、ちょっと指先でさわってみたりしました。わたしは、じっと窓の外のととうろうを見ながら、あの日のヒロ子ちゃんのお母さんの話をしました。ヒロ子ちゃんは、だまって聞いている様子でした。ヒロ子ちゃんが、わっと泣きだしたりしたらどうしようと、わたしは心配でした。でも、ふと、ヒロ子ちゃんの顔を見て、わたしはほっとしました。ヒロ子ちゃんは、その名ふだを胸のところにさえ、わたしの方を見ると、にっこり笑って、

「あたし、お母さんに似てますか？」

と、言うのです。

うれしいのやら、かわいそうなのやら、わたしのほうがすっかりなみだぐんでしまいました。

ヒロ子ちゃんは強い子でした。どんなことにも負けていませんでした。

お母さんが心配するといけないからと言って、わたしたちは、それからすぐ洋裁学校に帰りました。食堂を出て、橋をわたろうとすると、とうろうを見る人たちがいっ

ぱいでした。そこを通り過ぎて、ちょっと暗い所になりました。

「会ってみたいな……」

ポツンとヒロ子ちゃんが独り言のように言いました。勝ち気なヒロ子ちゃんは、その時、こっそり泣いていたのかもしれない。

その日は、わたしも洋裁学校の一部屋にとめてもらいました。わたしが起きると、ヒロ子ちゃんのお母さんが出て来て、

「ゆうべ、あの子はねないんですよ。」

と、言うのです。

「やっぱり」

と、わたしが心配そうに言うのと、

「いいえねえ、あなたにワイシャツ作ってたんですよ。見てやってください。」

そう言って、うれしそうに、紙に包んだワイシャツを、こっそり見せるのです。

「ないしょですよ。見せたなんて言ったら、しかられますからね。」

そっとひろげてみると、そのワイシャツのうでに、小さな、きのこのような原子雲のかさと、その下には、S・Iと、わたしのイニシャルが水色の糸でしゅうしてあるのです。

「よかったですね。」

「ええ、おかげさまで、もう何もかも安心ですもの……」

お母さんはそう言って、笑いながらも、そっと目をおさえるのでした。

わたしはその日の夜、広島駅で、汽車が出る時に、窓からそれを受け取りました。わたしはそれを胸にかかえながら、いつまでも十五年の年月の流れを考え続けていました。

汽車はするどい汽笛を鳴らして、登りにかかっています。

【授業記録】

2年B組 平成2年9月26日

指導者 森口健司

T：『ヒロシマの歌』をじっくり読んできましたけど、今日はみんなが『ヒロシマの歌』について感じたことや思ったことを発表してもらいたいと思います。そして、今日の授業を通して明日日からの修学旅行で広島へ行く意味をじっくりと考えたいと思います。

T₂：4月からみんなの思いを語ってもらう授業に取り組んできましたけど、さまざまな資料を学んでいく中で、みんなの鋭い感性に心を打たれることがしばしばありました。いつも話すことですが、みんなの年代から18歳ぐらいまでが、書物を読んでも、また多くの人の話を聞いても、最も感動する時代だと思います。そのときに、どれだけ多くの書物にふれるか、どれだけ多くの感動的な作品にふれるか、この世に生命を受けてきた人間として、どれだけみんなの中ですばらしい人間のあり方、生き方を求めていく下地を残していくことができるか、今という時代はみんなの人生にとって貴重な時代だと思うんです。さまざまな人間が存在します。目の前で人が不幸になっていく、そのことに何一つ心が痛まない人間だって存在するでしょう。しかし、人の不幸を許さないという生き方を貫いていくことができる人もたくさん存在すると思うんです。

T₃：人として何が大切であるか、人間としていかに人間らしく生きていくか。学校へ来ることの意味とは、そのことを問い続けていくことだと思うんです。みんなは学校でたくさんの知識を獲得していきます。その営みの中で、自分は人間として何が大切であるかということを探っていく。それが学校へ来ることの意味だと思うんです。修学旅行で広島へ行きます。そのことの意味、ヒロシマを学ぶということは、日本人として生まれてきた者の一つに使命だと思うんです。原子爆弾が世界の中で唯一落とされた日本の国、その国に生命を受けて生きていく人間の使命だと思うんです。みんなも、何十年か生きて、いつか生命終わる日が来る、その日本で生まれ日本で生きた意味があると思うんです。

T₄：修学旅行第1日目に訪れ、みんなで見つめるヒロシマに思いをはせ、『ヒロシマの歌』に寄せるみんなの思いを語ってもらい、仲間一人一人の思いをクラス全体の思いとする、そんな1時間にしたいと思います。それでは資料に注目してください。みんなが仲間一人一人の思いをかみしめながら、立派な修学旅行にし、ヒロシマとの出会いが、みんなの生き方あり方を問いただすような感動的な出会いとすることができればと思います。

T₅：ヒロシマを学ぶということは、生命を学ぶという

ことだと思うんです。このヒロシマの事実を目の前にして、みんなは人として何を思うか、何を感じるか。ヒロシマは、人間そのものを訴え、人間のあり方を問い続けていると思うんです。原爆資料館でなんとなく展示物をながめるのではない。みんなの瞳に展示物の一つ一つを焼き付けていく、そして、ヒロシマという場所を通して、人間として何が大切かということをつかんでほしい、そんな願いでいっぱいです。

T₆：最初に、この資料『ヒロシマの歌』の主人公の人物柄について、みんなが思うことを発表してください。

久次米：勝手な行動として殴られても、赤ちゃんの生命を必死に救おうとした主人公は、本当に心優しい人だと思います。どんな状況にあっても、優しさを失わないところがすごいと思いました。

近藤：ほくも、主人公はお母さんと赤ちゃんのことが心配で、自分がしかられても、この赤ちゃんの生命を助けようとしたところに人間の本当の優しさを感じました。

柴田：ほくも、主人公は人が困っているのを見過ごすことのできない優しい心を持った人だと感じました。

中羽：主人公は心の底から優しさに溢れた人だと思います。母親が死んでも、堅く赤ちゃんを握り締めていたのを「赤ちゃんは私があずかります」という感じで、死んだ母親に話しかけるように赤ちゃんを助けたところに、主人公の優しさがにじみ出ていたように思います。

市川：主人公について私の最も心に残ったところは、赤ちゃんを見捨てず、罰を受けるのをわかっていながら、赤ちゃんの生命を救うために、駅の方へ走って行ったところです。主人公は思いやりのある優しさに溢れた人だと思います。

岩瀬：私も、この主人公は立派で優しい人だと思います。赤ちゃんをお母さんからもぎ取るとき、「だいじょうぶですよ」と言いました。このお母さんは死んでしまっているのに、聞こえないはずなのに、そのお母さんを安心させるように言っていました。こんなところに主人公の思いやりと優しさを感じました。

榎井：私も主人公はとても優しい人だと思います。戦争中は上官の命令や自分のことだけで、人のことなどなかなか考えることができない状況であったはずな

・のに、死んでいくお母さんを必死に励まし、残された赤ちゃんを必死に救おうとしたところに、人間のすばらしさ、本当の優しさを感じました。

佐々木：主人公は優しく、どんな状況におかれても冷静な判断ができる人だと思います。原爆投下直後の異常な状況の中にあっても、一つの生命の重さを忘れることなく、人として立派な行動を取ることができたところがすばらしいと思いました。

T₇：優しさですね。戦争のあの異常な中にあっても、人間としての優しさを持っている。命令として動くのではなく、目の前で死んでいくお母さん、その子ども、その幼い生命を何とか助けたい守りたいと思う。自分の置かれている状況や立場を全く無視して生命を助ける行動がとれる優しさなんでしょうね。

T₈：私たちもいろいろな状況の中で生きていきます。でも、どのような状況にあっても絶対に忘れてはならないものであり、なくしてはならないもの、それは優しさだと思うんです。

T₉：この主人公の必死の優しさによって救われた赤ちゃん、その赤ちゃんを預けられて、その赤ちゃんに死んでいった自分の子の名前ヒロ子と名づけて、自分の子どもとして育てあげたお母さん、そのお母さんについて、みんなが感じたこと、思うことを発表してください。

香美：お母さんはヒロ子ちゃんのことを心から好きだったんだなあと思いました。だから、施設にあずけようと一度は決心したのに、それができなかったのだと思います。それはヒロ子ちゃんのことを心から好きであり、自分の子どもであって欲しかったから、ヒロ子ちゃんを手放すことができなかったんだと思います。

藤田：ヒロ子ちゃんを必死に育てようとしたお母さんを支えていたもの、それはヒロ子ちゃんへの深い愛情だと思います。自分がどんなに傷つこうとも、ヒロ子ちゃんを幸せにするために生き抜く姿に熱いものがこみ上げてきます。

村山：ほくもヒロ子ちゃんをどんなことがあっても育て上げようとするお母さんの姿に、お母さんのヒロ子ちゃんに寄せられる深い愛情と、強い意志を感じます。愛に溢れている人は本当に強いと思います。

久次米：どんなに生活が苦しい状況にあっても、だれか

にあずけようとせず、自分で育てて見せると言ったお母さんの姿に、どんなことがあっても崩し去ることのできない、人間の深い愛情を感じました。

竹内：たくさんの苦労の中にあっても精一杯にヒロ子ちゃんを育て上げようとしたお母さんは本当にすばらしいと思いました。お母さんの姿からどんな困難に直面しても壊すことのできない人間の深い愛情を感じます。

岩瀬：ヒロ子ちゃんを育てることにくじけそうになったお母さんは、ヒロ子ちゃんを残して無念のうちに死んでいったヒロ子ちゃんを生んだお母さんを尊敬し、その思いが痛い程わかったからこそ、どんな困難な状況にもくじけなかったんだと思います。

T₁₀：ヒロ子ちゃんをさまざまな困難な状況にあっても育てたお母さん、その姿に熱いものがこみ上げてきます。私はこの事実とは違う結果になった、悲しい事実をいくつか知っています。私のごく身近にあった話です。

T₁₁：戦争中に結婚され、お母さんのお腹の中に新しい生命が誕生した。やっと生まれてきた男の子、その子どもの誕生を家族みんなで祝った。しかし、その数日後に父親は戦場へとられていく。その数ヶ月後に父親は戦死した。死を覚悟はしていたけど、家族たちの心の中には死にはしない無事帰ってくるという思いがあった。残された子どもは終戦の日、5歳になっていた。その子をおいて、まだ若かったお母さんは実家に帰ってしまった。そして、違うところへお嫁に行ってしまった。残された男の子は、そのお父さんの弟、おじさんの子どもとして大きくなっていく。おじさんの子ども二人と、三人兄弟の一番上として成長していく。家族はお祖父さん、お祖母さん、お父さん、お母さん、弟、妹と自分を入れて7人家族、家の人たちにつらいということをごぼすことはなかったけれど、心の中にはつらかったこと、悲しかったことがあった。農家で牛を10頭ばかり飼っていた、小学校に入学したところから、学校から帰ると牛のえさをやる仕事を1時間程手伝わなければならなかった。弟、妹は年が離れていたもので、いつも一人でやっていた。友だちが遊びにきたときなどは、えさやりの仕事をさぼりたいと思った。でも、友だちと遊びたいとは言えなかった。とにかく、小さい

頃から肩身のせまい思いをしてきた。でも、小学校の頃、1年にたった一日だけ、その家でみんなが、自分を家族の一員として認めてくれ、みんなが大事にしてくれる日があった。それは慰霊祭の日だった。戦争でなくなった人の霊を慰める日だった。その慰霊祭の日だけは、戦争で死んだ父親のことを思い出して、お祖父さんも、お祖母さんも、お父さんも、お母さんも、その日だけは心から僕を大事にしてくれた。戦争で父親をなくした子どもだけが学校を昼までにしてくれて、神社での慰霊祭に行く。そのとき饅頭をくれた。その饅頭、甘いものがあまり食べられなかったあの頃、どれだけ食べたかったか。しかし、いつも家に持って帰った。その饅頭をお母さんが家族の人数分に切ってくれる。二つの饅頭を8等分してくれる。7人家族で一つずつ、いつも一つ余る。今日は死んでいったお前の父ちゃんの霊を慰める日だから、お前が食べなと言ってくれる。心の中は欲しくて欲しくてしかたがないのに、弟と妹に切ってやると、その残った一つを食べたことはなかった。やっぱり、遠慮があった。でも、お前が食べなと言ってくれることが本当にうれしかった。つらいも思いや寂しい思いをしながらも、中学校卒業までは、自分なりに幸せだったと思う。でも、中学3年のとき、進路決定のときほど、私は心の底から戦争を憎み、親父が生きてくれたらなあと思ったことはない。勉強は好きだったし、とにかく高校へ行きたかった。そのことをお父さんに話したときの口惜しさは、生涯忘れない。お前の面倒は中学校までしか見てやれん。私はこの言葉で高校進学を断念し、大阪に就職した。それでも、私を中学校まで面倒みてくれた両親には感謝している。工場の寮での生活、19歳のときにアパートに移った。4畳半でのアパートでの生活、やっと、自分の城がもてたと思った。気を使うことなく生活できるんだと思った。

T₁₂：こんな話を私は私のごく身近にいる人から聞かされたことがあります。でも、この資料『ヒロシマの歌』にえがかれたお母さんは、さまざまな困難な状況にあっても、ヒロ子ちゃんを立派に育てていきます。このお母さんには、どのような困難な状況にあっても、ヒロ子ちゃんを育てあげていこうとする愛に溢れています。主人公の優しさ、ヒロ子ちゃんを必

死に育てていったお母さんの愛、優しさと愛に支えられてヒロ子ちゃんは育っていきます。そして、ヒロ子ちゃんは自分のことを救い、その事実を語ってくれた主人公に寝ないでワシシャツをつくった。そのヒロ子ちゃんの気持ちについて思うことを発表してください。

長谷川：ヒロ子ちゃんの「私はあの人に助けてもらったんだ」という気持ちが、寝ないで何かをしたいという思いにつながったと思います。ヒロ子ちゃんの中には感謝の気持ちでいっぱいだったと思います。

元木：ヒロ子ちゃんは本当のお母さんにとても会いたかったらうと思います。でも、亡くなったお母さんは帰ってきません。お母さんがなくなった日のこと、そのときのお母さん、兵隊さんのことを思いながらワイシャツを作ったのだらうと思います。

高富：ヒロ子ちゃんは自分にできる精一杯のことをしてくれた自分の生命を助けてくれた主人公に対して、今、自分のできるせめてもの恩返しという思いで、必死にワイシャツを作ったんだと思います。

中川：ヒロ子ちゃんがワイシャツをつくった思いの中には、主人公への感謝の気持ちと、「私はお母さんと共に立派に生き抜きます」という思いが込められていたと思います。

大川：ヒロ子ちゃんは主人公に感謝の気持ちでいっぱいだったと思います。だから、どうしても、ワイシャツを受け取ってほしかつたし、ワイシャツを作ることとおして、自分はこんなに立派に成長しましたという思いと、すばらしいお母さんといっしょに暮らせて毎日が幸せですという思いを主人公に伝えたかったんだと思います。

岩瀬：ヒロ子ちゃんはワイシャツを作っているとき、主人公への感謝の気持ちと共に、本当のお母さんのことを思って涙もこぼれただらうと思います。でも、ワイシャツが出来上っていくと共に、「自分は自分を守るために必死に生き、死んでいった母の思いを胸に、これからの人生を今のお母さんと共に強く生きていくんだ」と決心したのではないかと思います。

T₁₃：感謝という言葉をみんながつかって発表してくれましたね。その感謝の表現として、自分はこれからお母さんと共にたくましく生きていきますよと、主人公の優しさに応えるべくワイシャツを一生懸命つ

くるヒロ子ちゃんの思い、そして、そのワイシャツの中にきのご雲を水色の糸で刺繍しています。この作品の最も強く考えてもらいたいところなんです。

T₁₄: きのご雲とは、原爆が落ちたときのできる、原爆の恐さを象徴するものですね。やがて、そのきのご雲が黒い雨を降らせていきます。その黒い雨がまた犠牲を大きくしていきます。そんな記録がたくさん残っています。そのきのご雲を水色の糸で刺繍した。そのことの意味、それはヒロ子ちゃん自身にもわからないかもしれない。いや、何か強い願いがヒロ子ちゃんの心の中にあって、そのあらわれとして、この水色のきのご雲の刺繍をつくったのかもしれない。みんなは、どうしてきのご雲の刺繍が水色の糸でなされたと思いますか、考えてみてください。

犬伏: 戦争のない真っ青なきれいな青空をイメージして刺繍をしたのだと思います。ヒロ子ちゃんの心の中は青空で象徴される平和を願う気持ちで、いっぱいだったと思います。

和智: 水色というのは、明るくてとても気持ちのいい色だと思います。水色の糸には平和な世の中になってほしいという願いが込められていたんだと思います。

中野: 自分に記憶のない8月6日のあの日、夏の青空の暑い中どんなことがあったのかをイメージして、また、晴天の中、本当の母親がどうだったかを考えながらぬったと思います。水色の刺繍は、暑い晴天の日の空という意味だと思います。

T₁₅: 原爆が投下された日、1945年8月6日8時15分、原爆が落とされる前までは、夏の真っ青な空だったと言います。その夏のさわやかな快晴の朝、8時15分に原爆が投下されるまでは、まさしく水色の透き通るような青空にヒロシマの街は覆われていたんです。

久次米: 水色の糸できのご雲を刺繍したヒロ子ちゃんの心の中は、二度と原爆で苦しんだり悲しんだりする人をなくしたいという思いと、原爆で青い空がなくなってしまうを防ごうとする思いがあったと思います。

長谷川: ぼくは、水色の刺繍の水色は、広島市の市民や原爆の犠牲となった人たちの涙を象徴していると思います。そして、その涙は真っ黒なきのご雲をすみきつ

愛情に支えられたものだ」と訴えたくてこの刺繍をしたように思います。

T₁₆: 水色は涙だということですね。

柴田: きのご雲の刺繍には、主人公にあの日の出来事と、自分のことをずっと覚えていてほしいというような思いが込められていたと思います。

加藤: ワイシャツを着るたびに私たち親子のことを思い出してほしいと願って刺繍をしたのだと思います。水色の糸は、原爆が落とされる前まで真っ青だった広島

の空をたとえているように思います。茂美: 私も水色はすみきった空や水の色を意味していると思います。原爆の黒とは、まったく違う平和への願いが込められていると思います。

佐々木: 水色は、原爆が落とされる前の青い空と、原爆で苦しみながら死んでいった人たちがほしかった水の色だと思います。水色には、ヒロ子ちゃんの憎しみや怒り、平和になってほしいという祈りが込められていると思います。

中川: 水色は、ヒロ子ちゃんの心の中の涙だと思います。そして、その涙には平和になってほしいという祈りが込められていると思います。

T₁₇: 水色のきのご雲にはヒロ子ちゃんの熱い願いが込められているように思うんです。どうして水色の糸を選んだのか、どうしてきのご雲を刺繍したのか、主人公に何を伝えたかったのか、自分のどんな思いをわかってほしかったのか、みんなの思うことを発表してくれたわけですけど、仲間の意見を聞いてどんな思いがみんなの中に広がっていきましたか。

T₁₈: 日本中のいろいろなところをみんなはこれから旅していくと思います。でも、その中でも、このヒロシマは、心の底から許せないことなんだという怒りがこみ上げ、生きるということの意味を深く考えさせていくヒロシマであり続けてほしい。いつまでも、みんな自身に人間のあり方、生き方をじっくりと考えさせていく場所であり続けてほしい。ヒロシマへ行ったら、ヒロシマにかかわる書物にふれたら、幸せのために、人間として人間らしく生きるんだというさまざまな思いがこみ上げていくヒロシマであり続けてほしいと思うんです。

T₁₉: 最後に、この作品『ヒロシマの歌』に寄せて、明後日、修学旅行第一日目にヒロシマへ行くというこ

。との意味をじっくり考えてほしいと思うんです。修学旅行第一日目ヒロシマに思いをはせて、この作品『ヒロシマの歌』が私たちに問いかけているものは何か。この資料を学習した意味は何であるのか。みんながこの作品から、仲間の発言から感じ取ったものを発表してください。

中山：私は私たちの今の生活はどのように築かれてきたかをもっともっと考えていかなければいけないと思います。戦争の苦しみ、戦争が終わった後に残された傷跡や悲しみ、そのことをじっくりと考えることなく、私たちは本当の幸せをつかむことはできないと思います。

T₂₀：今の私たちの暮らしがある。その背後には、たくさんさんの涙がある。たくさんさんの苦しみがある。その中で私たちの幸せが築かれてきた。そのことをじっくりと考えていく。ヒロシマは私たち日本人、いやすべての人間に、人間のあり方を問い続けていく、考えていく原点だと思うんです。

長崎：修学旅行を前にして、私たちは本当の平和について深く考えなければいけないと思います。平和とただ口先で言うのではなく、原爆を本当に許さないという怒りとその苦しみをつかむことができたとき、私たちは平和ということの意味をつかむことができるんだと思います。この作品に秘められたものを広島でじっくりと見つめてみたいと思います。

松本：ぼくはこの作品は、広島市にある原爆ドームや原爆資料館を心して見てこいと訴えているように思います。原爆資料館では、もし原爆がぼくたちの住む徳島に落とされたらと考え、原爆投下後の広島の悲劇をぼくの心の底に刻んできたいと思います。

二條：今は何不自由なく自由に生きられます。でも、昔の人は国家に縛られ、戦争の道具に使われてきました。その結果、あの恐ろしい出来事に出くわしたのだらうと思います。たくさんさんの犠牲があって今の社会があるけれど、戦争の犠牲となっていった人たちは、ぼくたちに「今は昔と違うんだ」と思ってほしくないだらうと思います。この作品は、ただ原爆が投下されてむごかったと感じるだけでなく、戦争の悲しさや人を最後の最後まで追いやっていく社会や自由を求める心を理解して、平和な国づくりをしたという願いが込められていると思います。

樹井：あんな悲しい戦争は二度と起こしてはいけない。一つ一つの生命を大切に、戦争で死んでいった人のためにも、この世界を平和にしなければならぬと思います。この『ヒロシマの歌』を通して私はそう思いました。あとき主人公がヒロ子ちゃんを拾わなかったら、ヒロ子ちゃんはもうこの世には存在していなかったと思います。この事実を学んで私は戦争中の本当に苦しい状況に合っても、主人公やヒロ子ちゃんを育てたお母さんのように、心優しい人たちがいることがとてもうれしかったです。すべての人たちがそんな優しさを持ったとき、戦争は起こらないと思います。

市川：この作品が私たちに訴えているもの、それは戦争というものがどんなものであるかを理解してほしいということ、そんなつらい戦争を二度と起こしてはいけないということだと思います。この作品から、今の自分がいかに幸せであるかということがわかります。でも、私たちはその幸せさに甘えることなく、平和というものの意味や戦争というものをもっともっと理解し、人間らしく生きるということを学んでいかなければいけないと思います。私は、私自身の人間性を磨く意味においても、原爆資料館でいろいろ勉強してきたいと思います。

竹内：私はこの資料で、人間の大切さ、支え合い助け合って生きることのすばらしさを教えられたような気がします。修学旅行で広島平和公園や原爆資料館へいくけど、展示されたものをじっくりと私の心に刻みつけ、私の思いをまとめてみたいと思います。そして、平和であるということが何であるか、私たちはどのように生きていかなければならないか、人間というものの在り方を勉強してきたいと思います。

大川：原爆がさまざまな悲しい状況を生み出していったことを、この作品は教えてくれていると同時に、生きるとはどんなことかを訴えているように思います。私たちは修学旅行で広島原爆資料館に行くことになっています。原爆の傷跡を象徴するような建物や衣服を残しておくということの意味を私たちはしっかりとこの目で学び取りたいと思います。それとこの前に先生に質問された、広島を漢字でなく片仮名でヒロシマと書くことの意味も、しっかりとつかんてきたいと思います。

T₂₁: 広島を片仮名でヒロシマと表わしています。どうして片仮名でヒロシマと表わすのだろうか。ヒロシマは全世界に訴えていくでしょう。原爆とは何であるか。生命とは何であるか。人間とは何であるのか。人間の生き方、人間の死に方とは何だろうか。そんなものをじっくりと考えていく。自分はそうでなくてよかった。あの人たちはかわいそうな人たちなんだとらえる。そんなものではない。このようなことは絶対あってはならないし、絶対に許されることではないんだという思いを持って、みんなはヒロシマと出会ってほしいと思うんです。これは部落問題にかかわってもそうです。人として何が大切であるか。そのことをしっかりと学んでいく修学旅行に、ヒロシマとの出会いになるようにしたいと思います。

T₂₂: 優しさと愛ですね。愛によって人間は救われていくだろうし、お互いの優しさによって、一人一人の人間は守られていくと思うんです。そんな愛や優しさをいつまでも持ち続けていくことができる、そんな生き方を学習していく。それが修学旅行でヒロシマへ行くことの意味であり、さまざまな学習を積み上げていくことの意味だと思うんです。修学旅行前の非常に慌ただしい、集団訓練とかで大変忙しい、時間的な余裕のない中で、今日の授業になりました。広島へ行くことの意味について考え学んだ『ヒロシマの歌』、この作品が広島市平和記念公園の中で、資料の一つ一つの場面を思い起こしながら、人間のあり方を見つめ、いつまでも忘れられない修学旅行にしたいと思います。

この『ヒロシマの歌』の学習を土台として、平和公園の中にある原爆の子の像の前で平和へのセレモニーを行う。そのセレモニーのとき、代表者が述べた宣言を修学旅行での学習のまとめとして紹介する。

【宣言】

広島は世界で最初に原子爆弾という恐ろしい兵器により、地獄のような光景となり、大変な被害を受けた街です。

ぼくは、初めて原子爆弾というものを知ってからしばらくは、そんなに恐ろしいものだとは思っていませんでした。普通の爆弾みたいなもので、放射能といっても大したものではないと思っていたのです。しかし、中学校二年生になり原子爆弾やヒロシマについて学習するにつ

れ、本当の原子爆弾の恐ろしさと原爆投下後のヒロシマの街を知りました。人間が一瞬にして、ただの肉の塊に、建物は瓦礫の山になってしまいます。そんなヒロシマを想像すると、ぼくたちは言葉を失ってしまいます。また、ぼくたちは今までの学習の中から、原子爆弾はそれだけではないということを知っています。放射能は原子爆弾による直接の光を浴びていなくても、放射能が原因となって起こる病気で、現在も苦しんでいる人たちがたくさんいます。そんな犠牲となった人たちのためにも、その苦しみや悲しみを受け継ぎ、原子爆弾を許さないという生き方、平和を求め続けるという生き方をぼくたちは貫いていかなければならないと思います。

道徳の授業も、中学二年生になって、かなり熱が入ってきました。『ヒロシマの歌』という作品で、自分のことを考えるだけで精一杯の原子爆弾投下の直後、一つの生命を必死に救い出した人間の優しさと、戦後数々の困難の中にあってもその子どもを自分の子どもとして立派に育て上げた人間の愛の深さを学びました。どんな不幸な場面に直面しても奪い取ることができない優しさや愛が、ぼくたちすべての人間の中にあるんだと思います。この優しさや愛をすべての人が大切に育てていくことができたならば、このような戦争は決して起こらなかったのではないのでしょうか。

ヒロシマが、原子爆弾を落とされるというひどい目に合い、ぼくたちの想像を絶する被害を受け、たくさんの人々が犠牲になってしまったのは、すべて戦争というものの責任です。戦争を始めてしまった人々の責任です。ぼくたちは、戦争というものの間違いや無謀さについて真剣に考えていきます。そして、この世から原子爆弾をなくして、二度とこのような悲劇が起こらないように努力できる一人の人間になるために、人間として大切なものを学び求めて、これからの人生を生きていくことを宣言します。

一九九〇年一〇月三日

板野中学校修学旅行団

生徒代表 久次米 将樹